

旭川の冬を生き抜く

北海道中央部の旭川地方の冬は長く厳しく、大雪と氷点下 20 度にも及ぶ低温に見舞われます。このような条件にもかかわらず、多くの動植物はそれぞれ異なる仕組みや戦術で生き延びるよう適応しています。

マツやモミなどの針葉樹は、蒸散を抑える細い針状の葉を持ち、寒冷時でも熱と水分の損失を防ぐことができます。この地域原産の落葉樹には、キタコブシ、ナラ、イタヤカエデなどがあります。これらは冬眠状態になり、葉を落とし、枝から水分を引き上げることで寒さに耐えます。これにより水分の損失を防ぎ、栄養を保持し、小枝に残った芽を霜の被害から守ります。さらに鱗片や毛羽立った外皮が芽を断熱し、寒さから保護します。

エゾシカなどの動物は、冬の間栄養源として落葉樹の樹皮や小枝、芽を利用します。エゾユキウサギも小枝を探して食べ、冬毛の白い体毛で雪に紛れています。

冬眠する動物もいれば、冬の間も活動を続ける種もいます。エゾシマリスは森の中に巣穴を掘り、ドングリの寝床で体を丸め、落ち葉にくるまって冬を過ごします。掘った土で入口の通路を埋め、捕食者から身を守ります。冬眠中のエゾシマリスは代謝が低下し、体温は約 37 度から

8 度まで下がります。呼吸は 20 秒に 1 回のペースまで遅くなります。